

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名 竹下則子

学位の種類 博士（教育学）

学位記番号 第甲25号

学位授与の要件 大阪総合保育大学学位規程第13条

学位授与の日付 令和4 年 3月 21日

学位論文題目 音楽分野における保育者の資質向上に関する研究

ー鍵盤楽器による子どもに視線を送りながら伴奏する意義を手掛かりにー

論文審査委員 主査 大方美香（大阪総合保育大学教授・博士(教育学)）

副査 渡辺俊太郎（大阪総合保育大学教授・博士（心理学））

副査 新山真弓（兵庫教育大学教授・博士(教育学)）

論文の概要

子どもとのコミュニケーションにおいて、言葉によるコミュニケーションがまだ十分ではない幼児にとって、音楽やアイコンタクトなどによる非言語的なコミュニケーションは子どもの表現活動を行う上で重要なツールである。視線や表情は特にその送り手の心的状態を、時に言葉以上に私たちに示し、きわめて高度な情報価を有している。

保育者が子どもの顔を見ながら歌いかけることで、子どもと楽しい雰囲気を共有しながらコミュニケーションをとることが可能であると考えられる。子どもの様子を見ながら鍵盤楽器を演奏する授業は一部の大学でなされてきたが、その意義については、これまで深く研究がなされていなかった。また子どもを見ながら伴奏する経験がない教員養成校の学生にとって、その技術を駆使することは容易なことではなく、その技術を習得する方法や必要性についても研究がなされていなかった。さらに保育者は子どもとの歌唱伴奏時などで疑問や不安な気持ちを持つ時があり、就職後の音楽研修そのものは多くあるが、「子どもの音楽表現活動」のための伴奏法の音楽研修や相談などは普及しておらず、その研究も十分になされてこなかった。

本研究では「子どもを見ながら伴奏する」意義を明らかにし、アイコンタクトなどによる非言語的なコミュニケーションが子どもの音楽表現にいかなる影響を及ぼすのかについて調査、観察、面接を通して明らかにした。また、伴奏中の子どもに視線を送る非言語コミュニケーションの重要性を保育現場の音楽研修や相談などでも伝え、教員養成校の学生や保育者の音楽的な資質向上に貢献することを目的とした。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 研究の背景と問題提起

第1章 先行研究の検討と研究の目的

第2章 子どもに視線を送りながら伴奏する意義

第3章 教員養成校における鍵盤楽器の伴奏法

第4章 保育現場における子どもに視線を送りながら伴奏する事例調査

第5章 保育者の資質向上と研修

結章 総括と今後の課題

第1章第1節では教員養成校の学生や保育現場の保育者に求められる資質能力の育成に関する先行研究を以下の点から検討した。

第1節第1項では子どもと音楽表現について、第1節第2項では子どもの歌唱活動と伴奏について、第1節第3項では非言語コミュニケーションの重要性について先行研究を概観した。第1節第4項では視線とアイコンタクトについて、第1節第5項では教員養成校における音楽関連授業のカリキュラムと資質能力の向上について、第1節第6項では保育現場における音楽研修制度について、第1節第7項では本研究に関する先行研究の動向について検討した。続いて第1章第2節ではこれらの先行研究から諸問題を探り出し、本研究における目的を記載した。

第2章第1節では保育現場において子どもに視線を送りながら鍵盤楽器で伴奏を行う意義について保育者を対象に質問紙による調査を行った。保育者の視線を送る行動は子どもに様々な変化を与えることが明らかとなり、保育者は子どもの表情や行動を確認し、子どもの心理面や行動面への影響を考慮して子どもに視線を送りながら伴奏していた。第2節では子どもに視線を送りながら伴奏した時と送らずに伴奏した時の反応について子どもを対象にインタビューによる調査をおこなった。調査の結果、「保育者が見てくれてうれしい」「保育者が見ると緊張する」「はずかしい」「保育者が見ても見なくてもどちらでもよい」などの意見があり、子どもの動きや心情に変化が見られた。

第3章第1節では教員養成校における伴奏法の実施状況について調査した。調査の結果、ほとんどの大学ではピアノの技術上達に追われていることが明らかとなった。第2節では教員養成校の学生20人に子どもを見ながら伴奏する意義と意識調査を行った。保育者は日常的に子どもをみながら伴奏しているが、実習中にほとんどの学生は子どもや教室の様子を見ながら伴奏をする機会がないか、伴奏をすることができないことがうかがえた。学生は子ども理解に基づく伴奏の授業や練習を求めているが学びの場がないことが明らかとなった。第3節では20名の学生が子ども役の学生を見ながら伴奏する自身の録画映像を視聴し、繰り返し練習することによる技術獲得の効果について検証した。さらに鍵盤楽器の演奏経験に差異がある3人の学生を選出し子ども役の学生を見ながら伴奏する時間の長さや顔の向く角度がいかに変化するかについて調査を行った。その結果、学生が練習を重ねるこ

とで子ども役の学生に視線を送りながら伴奏する時間が長くなることが明らかになった。また鍵盤楽器の演奏歴が短い学生でも、いくつかの方法や対処法を用いて工夫をすれば、これらの技術習得が可能であることが明らかになった。

第4章では子どもを見ながら伴奏する事例調査として保育現場で勤務する4人の保育者を対象に子どもを見ながら伴奏する方法について音楽経験歴などと照合し調査を行った。調査の結果、保育者は学生と比較した時、より長い時間、子どもを見ながら伴奏していることが明らかとなった。また子どもを見て伴奏する能力は学生時代から誰しもが備わっているとは限らず、就職直後から子どもを見ながら伴奏することが可能とは限らないことが明らかとなった。子どもを見ながら伴奏する方法は、就職後の経験値が高くなるほど、習得値も上がることが示唆された。このことから子どもを見ながら伴奏する経験は、保育者が保育者の資質を向上するために必要であり、学生が実習や就職前にこれらの機会を持つことは有意義な取り組みであると考えられる。

第5章第1節では保育現場における音楽研修の必要度を調査した。園の方針によって多様な回答が得られたが、音楽研修を希望する園や保育者が存在することから、少なからずとも音楽研修の需要はあることが明らかとなった。第2節では音楽関連分野の保育者研修と相談の実例調査を行った。調査の結果、鍵盤楽器による伴奏研修は、保育者の鍵盤楽器による伴奏の方法や意欲が向上する一因となり、また保育者の当面の悩みを解消し、伴奏のプレッシャーや不安感を取り除くなど、保育者の精神的な面をサポートする役割も担うことが明らかとなった。教員養成校では音楽的な技術の向上をめざすことに重点が置かれがちである。しかしながら技術向上だけを重視するのではなく、子どもの豊かな感性や表現を育むために、子どもとアイコンタクトを交わし、コミュニケーションを図ることが、より重要であることが見出された。また保育現場において伴奏法についての研修の機会を持つことは、実際の保育現場における音楽活動やその問題点を把握・理解することができ、教員養成校における学生への鍵盤楽器による伴奏法の方向性や新たな観点からの鍵盤楽器による伴奏や楽譜についての検討や見直しをすることができた。

尚、本論文の各章は、以下の査読付き雑誌に公刊されている。

第2章

竹下則子 (2020). 保育現場における歌唱指導の一考察ー保育者が子どもに視線を送りながら伴奏する意義についてー. びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 11 号 (査読有) .

第3章 第2節

竹下則子(2018). 教員養成校における歌唱指導技術の育成 2ー子どもに視線を送りながらピアノを演奏する技術についてー. びわこ学院大学外部連携研究センター年報, 第4号. (査読無) .

第3章第3節

竹下則子(2020). 教員養成校における音楽指導技術の育成—子どもの方を向いて伴奏する技術について—. 大阪総合保育大学紀要, 14 号. (査読有).

第4章第1節

竹下則子(2021). 保育現場における音楽指導に関する一考察—子どもの方を見ながら伴奏する技術について—. びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 12 号 (査読有).

第4章第2節

竹下則子(2021). 保育現場における音楽研修についての一考察—音楽関連分野の保育者研修と相談—. びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 13 号 (査読有).

〔1〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、申請者は養成校の教員として、保育学をより深く学ぶために本学に入学した。本研究は、教員養成校及び保育施設における子どもの音楽指導について分析・検討することを通して、子どもの音楽表現のために教員養成校及び保育現場に求められる資質能力の育成方法を分析し、「子どもを見ながら演奏する」保育者の育成の重要性を明らかにし、4 編の国内の学術誌（査読有）に報告した。

第二の独創性については、

「子どもを見ながら演奏する」意義を明らかにし、アイコンタクトなどによる非言語的なコミュニケーションが子どもの音楽表現にいかなる影響を及ぼすのかについて観察、調査を通して明らかにした研究は殆ど今までされてこなかったもので独創的といえる。

第三の研究領域における水準の引き上げについては、

子どもに視線を送りながら伴奏する技術を習得する意義と習得過程について、保育現場における子どもに視線を送りながら伴奏する技術の実例調査を丹念に行い、さらに子どもに視線を送りながら伴奏する技術を習得するための授業実践を具体化した。その水準の引き上げに貢献するものと評価する。

第四の学際性については、

子ども理解に基づいた鍵盤楽器による「子どもに視線を送りながら伴奏する」技術習得について考察を行い、教員養成校での音楽技術習得が保育現場においても音楽研修や相談を通して継続されるべきであることを提唱、その可能性を探ったところが学際性と言える。子

どもが鍵盤楽器のどこに位置しているかによって、保育者の子どもへの視線の送り方は変化することを検証したところに意味がある。

第五の大学院が授与する博士(教育学)の学位授与については、「子どもに視線を送りながら伴奏する技術を習得するための授業実践」習得過程を明らかにし、保育者の養成に新たな知見を加えた論文であり、保育学及び教育学に寄与した研究といえる。

本論文は、以上のように、評価すべき独創性を豊かに備えているが、論者自身が今後の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により指摘された問題点をいくつか挙げておくことにする。

第一に、保育現場において、子どもに視線を送りながらピアノ伴奏することは必要不可欠であり、その効果的な伴奏形態等を模索する着眼点は評価できる。しかし、それを実証する各章の調査計画や調査方法は客観性に乏しく、有効な方法までは示されていない。さらに、それをどのように現場に生かすのかが不明である。「保育者への音楽研修や相談を含め、研修における一分野として確立していく必要性」があるという指摘があった。

第二に、就職後の実技指導と相談の研修の必要性は示されているが、従来の実技指導との差異、保育現場において、「子どもに視線を送る伴奏」にどう生かされるか等の有効性について議論があり問われた。

第三に、各章が必ずしも有機的に構成されていないのではないかという論文構成に対する指摘があった。具体的に、第2～4章の「子どもに視線を送る伴奏の実例調査」の章と、第5章の「ピアノ実技研修」の関連性がわかりにくいので、第2～4章は、「子どもに視線を送る伴奏の実例調査」の章として一つの章にまとめるべきとの提案があった。

第四に、「子どもの行動や心情を理解したうえで実例調査を行い、それを明らかにした点」について議論がなされた。また、就職後の音楽活動の研修や相談を通して継続することについて、視線を送りながら演奏可能な伴奏法や編曲法のメソッドの提案が必要なのではないかという課題について指摘があった。

いずれも、今後の研究において考察の幅を拡げていくための課題となろう。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。たしかに、本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかである。しかし、これらは、今後の研究の進展によって早晚解決されるであろうし、課程博士論文としての価値を損なうものではない。

博士学位請求論文公開審査会において審査委員により厳しいコメントがあったが、それに対しての修正がなされた。

よって、以上の審査結果より、本論文は、博士(教育学)の授与にふさわしいと論文審査委員全員一致で判断した。